

狼を助けた話

清川村煤ヶ谷

煤ヶ谷は、四方山に囲まれた山村でありますので、昔から猪や鹿が多く、時折狼を見かけた人もいたという事です。従って猟師も多かったようです。

私の家でも、百メートル余り離れた所に落し穴を堀り、猪を捕えようとしたそうです。落し穴は、直径二メートル位で、深さ数メートルの穴を堀り、その上に粗朶を並べて土をかけ、カモフラージュして落ちるのを待っていたのです。

ある時、見廻りに行って穴の中をのぞいてびっくりした事には、猪と思っていたのが狼だったのです。思案の末、家に行ってはしごを持ってき、穴の中に向い、「助けてやるから喰いつくなよ。」と言って大担にもはしごを降りて行って狼のうしろにまわり、そっと押し上げるようにすると、狼は、はしごをばらばらと上

って一度穴の中を見たそうです。それは人間にしてみれば「ありがとう」という意味にとれたそうです。狼は一晚中穴の外に出ようとして暴れて、体が疲れて抵抗がなかったのです。

この事があって数日後、裏の勝手口の戸を開けると兎が一匹置いてありました。これはおそらく狼がお礼に持ってきたものと思われたそうです。



これは明治の初めの頃の話で、狼を助けたのは平五郎という祖父であることが祖母から聞かされました。私の祖母は昔の話が好きで、八十八歳で亡くなりましたが、私が子供のとき、雪の降る夜などは暗いランプの下でよくこの話をしてくれたのを覚えています。星移り年代っても、わが家では実話として語り伝えられています。